

本ガイドラインの1章から6章までを区切るテーマカラーは、日本の伝統色から選びました。

1章：深縹（こきはなだ / ふかきはなだ）

「縹」は古くから藍染めの色名で、藍色より薄く、浅葱色より濃い色です。「日本書紀」にすでに深縹、浅縹の服飾名が見られます。

2章：織部（おりべ）

安土桃山時代の茶人、古田織部が好んだ、暗く渋みのある深い緑色です。彼の指導で作られた「織部焼」の緑色の釉薬に由来します。

3章：京紫（きょうむらさき）

古代紫とも呼ばれる赤みのある紫です。紫染の伝統を引き継いだ京都の地名が付け加えられ、京紫とも呼ばれるようになりました。

4章：深藍色（ふかきあいろ）

藍染めの青に、黄檗（きはだ）などの黄色い染料を重ねて染め上げた深い青緑色です。平安時代の書物「延喜式」にも記されています。

5章：韓紅・唐紅（からくれない）

呉からやってきた染料「呉藍（くれあい）」が「くれない」となりました。紅花を何度も染め重ねて作られる、鮮やかで濃い赤色です。

6章：柑子色（こうじいろ）

柑子はミカン系の植物で、色はその実の色を表します。平安時代の文学にも登場する古くから愛されてきた色名です。

日本の伝統色とは、日本の豊かな自然や四季の移ろい、歴史的な文化の中で育まれてきた固有の色名を持つ色彩を指します。その多くは、身の回りの草木や花、地名、人名などに由来しています。

古くから日本の風景にあったこれらの色彩は、歴史を感じる京都の町並みや自然環境に溶け込み、わたしたちに心地よい安心感を与えます。

彩度（鮮やかさ）を抑えながら天然素材に由来する伝統色を選んだり、鮮やかな伝統色をアクセントとして少しだけ用いたりすることで、町並みの魅力を高め、見る人の心に響く京都ならではの広告物をデザインしてみてください。

参考文献

「日本の色辞典」吉岡幸雄 紫紅社

「日本の伝統色」コロナ・ブックス編集部 株式会社平凡社

「すぐわかる日本の伝統色 改訂版」福田邦夫 株式会社東京美術

デザイン協力 (京都工芸繊維大学 中野研究室)

藺部 壤彦氏 | 河根 拓希氏 | 小牧 悠人氏

- ◆ 本ガイドラインの広告物等の写真には、本ガイドラインでの使用に限り掲載のご協力をいただいているものが含まれています。無断での転載や複製はご遠慮ください。
- ◆ 写真は撮影当時のものです。現在は該当の広告物がない場合や、実際の風景と異なる場合があります。
- ◆ 一部のイメージ画像に生成AIで作成した架空のイラストや写真を使用しています。生成AIによって作成された画像はあくまでイメージであり、実在する特定の店舗、企業、商品及び場所を示すものではありません。
- ◆ 本ガイドラインの内容は、作成時の法令・条例等に基づいています。関係法令等の改正により、記載内容が変更される場合があります。
- ◆ 本ガイドラインに掲載されている事例写真の追加・差替等、ガイドラインの内容に影響を与えない変更については、改訂履歴に残さず行うことがあります。あらかじめご了承ください。

京の景観ガイドライン 広告物編

平成21年3月発行 令和8年3月改訂

京都市都市計画局都市景観部広告景観づくり推進課
〒604-8571

京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地

TEL 075-222-4137

FAX 075-251-2877
